【ねがいましては】

平成２８年1月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第３０３号

「自立練習の変化」

　ある日のインターネットでの記事に目がとまりました。見出しがドキッとするものだったからです。『電話が怖くて退職…今どきの新人は「弱すぎ」？』というものです。

　常々、ここ最近の子ども達のネガティブが気になっていたものですから、余計に響いたしだいです。読み続けてみると、なるほどというものでした。

　ここ数十年のうちに、電話に対する家族のあり方が激変していることがその要因になっているとのこと。確かに私の幼少の頃は、電話と言えば家電話。家中に響く電話の音、誰への電話なのかは出てみないとわからないもの。で、近くにいる者か、又は出たい者が出る。「はい、もしもし、〇〇でございます。」などと、掛けてきた相手に失礼の無いように出る。子どもが出ても、その応対が不自然であったり、失礼極まりないものであったりすると、すかさず家長よりきつい指導、「もっと丁寧な出方をしなさい。」とか、「もっときれいな言葉遣いをしなさい。」などと、電話については師匠と弟子のような関係が親と子の間にもあったようです。

　実はこれがれっきとした、社会へ旅立つ上での大切な訓練になっていたのです。

　そして今、誰もが自分専用の電話機を手にし、かかってこようものなら、画面にしっかりと名前は出るし、そのたびごとに出る際の言葉選びができるわけで、かなり緊張をせずに済むことができます。子どもたちにとっては、それが電話との触れあいのスタートといっても過言ではない時代になっています。

　そのような電話とのつきあいに慣れ親しんでしまった若者が、いざ就職、とにかくかかってきた電話にはすぐに出なさいといった会社ならではの当たり前なスタイルは通用しなくなりつつあることを、上司の方々は知っていなければならないと書いてありました。そのための細やかなアプローチがあります。

１．「ちゃんと見てて」と言って部下の前で作業をする。２．その後で、「何か質問があるか」問いかける。３．質問がなければやらせてみる。４．ところが、きちんとできない。

　そこですかさず、「わからないのなら、なぜさっき質問しなかったのか」と相手を追い詰めるのはマズイ、と書いてありました。

　「仕事は見て覚えろ」「技は教わるのではなく盗め」などと、慣用句にでもなりそうな言葉がありますが、どうやら昨今は、それではいけない世の中になりつつあるようです。

　核家族化が進み、『躾』という家族間にあって当たり前のものが徐々に少なくなりつつある今、私たちは不安を益々増幅させるばかりになっています。

　あいさつは誰よりも先にせよ。玄関では必ず靴をそろえよ。常に全体像をとらえ、傍にいる方が困っているようであれば、手を差し伸べよ。などなど、数え切れないほどの周りとの接し方を、私たちは当たり前のように、家族や家族と言ってもおかしくない、この上ない愛情をかけてくださる方々から教わってきました。

　そこから育つ大切なもの・・・「気くばり」

　日本的な、おもてなしの原点である「気くばり」は、そんなところから育っているのかもしれないと思っています。

　あまりにも便利になりすぎてしまった豊かさは、ひょっとしたら人のこころを少しずつ劣化させているのかもしれません。

　お願いだから勉強漬けだけの少年期にならずに、さまざまな方々との出会い、そして触れ合いから、多くの礼節を身につけていただきたいものです。

　少なくとも、電話に出るのが怖いから会社をすぐ辞めるといったことだけは避けたいものです。何のためのあの勉強だったのでしょう。と、ご家族は思ってしまうかもしれません。ご家族の多くの方々は、小学校時代より成績優秀、それなりの高校へ進学、有名大学合格卒業、一流企業就職、という構図を描かれています。（ちょっと皮肉たっぷり）

　電話が原因で即会社を辞めた、などということでは、ご家族は嘆いても収まりがつきません。「もっと、精神的にタフな子に育ててておけばよかった」ということになるのでしょうか。

　で、今一度原点に戻ってお考えください。成績成績一点張りで、子育てを考えてきたのはどこのどなた様だったのか。その結果、電話が原因で早速会社を辞める羽目になってしまったお子さんに育て上げたのは、まぎれもなく誰なのか。

　「～しなさい」ばかりで育ってきた子どもたちは、自分の考えで生きようとする力が希薄になっています。誰かに命令されないと生きていけないような心根になっているかもしれません。

　失敗を恐れず、我武者羅に前進あるのみ。失敗したらそれを繰り返さないようにするにはどうすべきか、自身で考える生き方をしよう。その手法で日本一になったチームがあります。プロ野球のソフトバンクホークスです。アナウンサーが「どのように、指示なさったのですか。という質問に、工藤監督は「なにもしません。自分たちで考えようと常々言っています。」それを聞いて、やはりそうだったか。と、私は深くうなずきました。さて、子どもたち、指示や命令を待っているようでは、一人前にはなれませんね。失敗大歓迎、自分自身で歩きましょう。